

# 地域医療 明日を見つめて

第4部 担い手はいま

札幌市の画像診断会社「M I T I」の社長で放射線科医の土本正さん(38)の姿が5月中旬、後志管内真狩村の野の花診療所にあった。同診療所で撮影した画像を診断し、札幌の病院に紹介した患者が、主治医から完治を告げられる場面に立ち会ったためだった。土本さんはコンピューター断層撮影装置(CT)などの画像から病気を診断する専門

患者のCT画像について野の花診療所で話し合う土本さん(中央)と高橋さん(右)、富田さん



## ④ つなぎ役

# 都市の専門病院と連携

医。札幌医大病院の勤務医だが、「広大な北海道では、出張するだけでは限界がある」と、IT技術で遠隔診断

する会社を2007年に設立した。

さらに昨秋から、地方の診療所と都市部の専門病院をつなげる取り組みを始めた。各地の画像診断を引き受けていて、特に時間が勝負の脳卒中で患者の受け入れ先探しに困

る、地方の医師が多いことを知ったからだ。

野の花診療所の富田均院長(58)もその一人。近隣の総合病院では治療ができず、都市部の脳神経外科で受け入れてくれるとも限らない状況だった。

「2時間圏なら搬送中も指示をすれば治療可能」と土本さんは昨夏、非常勤医となった札幌白石記念病院に地方と

の連携を訴えた。同病院も快諾。今年1月からは、高橋明副院長(50)が真狩に出向き定期的な脳神経外科の専門外来を開設している。

「地方と都市の医師が直接連携できれば、脳卒中患者をもっと助けられる」。土本さんはこの取り組みを全道各地に広げる構想を掲げ、道東や道南の専門病院に働きかけて

医療ソーシャルワーカー(MSW)が地域の病院で、がん患者の相談にも乗り始めた。MSWは病院で患者の転院先の調整や退院後の仕事、介護など生活面の相談に乗って支援するつなぎ役を果たしているというのが一般的なイメージ。がんの場合はがん治療を掲げる都市部の病院に相談した方がいいと思われがちだ。

そこで、北海道医療ソーシャルワーカー協会は「地元で気軽に相談できれば、自宅に戻っても安心して暮らせる」と、地域で広くがん患者の相談を受ける病院を募集。今春から、49病院が相談に応じている。

町村部では唯一の相談窓口となった道南ロイヤル病院(檜山管内せたな町)からは、2時間半かかる函館まで行かないと、がん治療の拠点病院がない。そのため治療後、訪問での診療や看護、リハビリを手配するなど、自宅に戻るための支援に存在感を発揮している。

## 先駆者のカルテ

## がん相談窓口を拡大